

## ガウチョ音楽からみる、アルゼンチン国民アイデンティティーの変化と持続

川端 美都子（文学研究科 音楽学）

19世紀末にアルゼンチンで起こったナショナリズムや国民アイデンティティー構築をめぐる問題は、同国やアメリカ合衆国においては活発に議論が交わされているのに対し、これまで我が国においては文化人類学や地域研究の専門領域となっており、音楽学において研究されることは少なかった。しかし、1990年代以降、アメリカ合衆国を中心に発展した音楽学における「グローバリゼーション」研究は、逆に両国における研究アプローチないしは見解の相違、また政治的理由から、様々なレベルで学問上の軋轢を生じさせる結果となった。すなわち、米国がアルゼンチンの学問的閉塞状況や遅延を批判するのに対し、後者は前者の情報偏重主義による実体験の欠如を指摘してきたのである。本調査研究は、アルゼンチン国民アイデンティティーが、このような政治的背景をもつ同国音楽研究と、どのような「駆け引き」をしながら「アルゼンチン性」を保ってきているのかという問題を出発点としている。

アルゼンチン・アイデンティティーの構築にとりわけ重要な役割を果たしたのは、19世紀末から20世紀前半に同国で起こった一種の民俗復興運動である「ガウチェスコの伝統 *tradición gauchesca*」と、そのなかで人気を博した大衆芸能、クリオージョ・サーカス *circo criollo*（アルゼンチン風サーカス）である。この舞台表演は2部で構成されており、第1部のアクロバティックな演技の後、ガウチョ *gaucho*（アルゼンチンの牧童）を主人公とした芝居が、アルゼンチンの地方音楽とともにパントマイムで上演されていた。同時期に頂点に達していたヨーロッパ諸国からの移民流入と、それにとまなう国家アイデンティティーの危機が叫ばれるなか、サーカスの壇上における役者演じるガウチョは、近代化以前の「旧世界」から続く「伝統」を体現していたのである。つまり、新しい国家像を模索する時代のなかで、クリオージョ・サーカスの存在は既存のアルゼンチン共同体のみならず、移民で構成された新国民たちにとっても、ガウチョという国家英雄精神の象徴を中心に国民を統合していく巧妙な文化装置であった。

本調査研究の目的は、このような経緯で確立した国民アイデンティティーが、現在のアルゼンチンにおいて、どのように変化また持続してきているのかについて、都市と地方における舞台表演とそこで用いられる音楽を比較しながら検証し、論じていくことである。本発表では、これまでの調査のなかから、好例である2つのイベントをとりあげる。すなわち2005年2月にブエノス・アイレスのエル・ナシオナル *El Nacional* 劇場にて初演されたガウチョ・ミュージカル《エル・ナティーボ *El Nativo*》と、2008年1月にコルドバ州ラボルデ市において行われた「マランボ・ナショナル・フェスティバル *Festival Nacional del Malambo*」である。どちらもガウチョとその音楽をテーマとしている点は共通しているが、

演じられている場所はもとより、どのように gaucho が表象されているのか、どの地方音楽が演奏されているのか、また観客、演じ手が誰であるのか、という点で決定的に異なっている。この相違がどのように、それぞれの現場における人々のアイデンティティ形成と関わっているのか、また冒頭で述べた学問上の軌轍を含め、グローバリゼーションという名の水面下で起こる、アメリカ合衆国とアルゼンチンの間、そして都市と地方の間という様々なレベルでの「駆け引き」と、どのように関係しているのかを明らかにしたい。

本調査過程においてはブエノス・アイレス市における国立図書館、国会図書館、またセルバンテス劇場附属博物館における資料調査や、アメリカ合衆国におけるアルゼンチン音楽研究者との議論、また文献収集に加え、コルドバ州におけるフェスティバルでの現地調査や、ブエノス・アイレス州の一般家庭における音楽実践の調査などをおこなった。歴史的観点に加えて、フィールドワーク、民族誌的アプローチなどの民族音楽学的手法を組み合わせることで、過去の音楽のみを扱ってきた従来の歴史音楽学の枠組みを超え、現場からの視点を組み込んだ、文化人類学や社会学の領域にもまたがる、より総合的な研究を目指している。gaucho とその音楽を基礎に築きあげられた国民アイデンティティを、過去から現在の脈絡のなかで検証することで、この伝統的な人物像を現代の神話のなかで維持することと、グローバル化した現代において分節・接合された「アルゼンチン性」を位置づけることの間で生じるジレンマを描き出していくことが本発表のねらいである。